Topics トピックス CINEMAの世界から

奇跡の映画「劔岳 点の記」(中)

観客数240万人の報告

東映株式会社 プロデューサー　角田 朝雄

映画「劔岳 点の記」は，日本映画界屈指の撮影者である木村大作さんが，50年にわたる映画人生を賭けて挑んだ映画です。

「本物の映画を作りたい」という，シンプルだが木村氏の人生を貫く想いが，新田次郎の原作「劔岳 点の記」との出会いを授けたのでしょう。原作は，雄大な大自然の中で，黙々と自らの仕事に献身する男たちの物語。多少，映画製作を知る人間なら，映像化不可能と尻込みする原作です。

木村監督は憤然と立ちむかった。「八甲田山」や「復活の日」など，雄大な自然の中の人間ドラマを作り続けてきた監督ならでは，至極真っ当で愚直な方法論で。CGを使わないとか，実際の場所で撮影するとか，それだけの問題ではなしに「柴崎役をお芝居で演じるのではなく，浅野さん自身としてその場にいて感じたことを表現してほしい」この言葉にこそ，監督の信じる「本物」が隠れています。

監督は，原作とほとんど同じ場所で，同じ手間と時間を掛けて撮影を行うことを決めました。山岳地帯での少人数編成の撮影スタイルを考案し，山岳ガイドをはじめ，スタッフ，仲間たちを集めました。そして，これまでの常識を取り払えと迫る。「これは，撮影ではない。苦行なのだ」もちろん効率よく誤魔化して撮ることはできたでしょう。交通の便のよき所で，まとめて撮る。あるいはCGを利用して，俳優部分はスタジオで撮影して合成する。しかし，そうした手法ではこの映画が成立しないことを，誰よりも木村監督は知っていたのです。

想像して欲しい。スタッフ，キャストが生活する山小屋での毎日を。ネットは勿論のこと，電話も通じない。プライベートな時間も空間もない中で共同生活を送る。あたりが暗い早朝から，木村監督は天気図を睨み，その日の撮影スケジュールを決める。撮影場所まで，全員が機材や衣裳など，撮影に必要な一切を背負い何時間もひたすら歩く。天気の変わりやすい山の中，辿り着いても自然条件が整わなければひたすら待つ。一瞬の天候の変わり目を狙っての撮影。待ってもダメなら，また歩いて戻って，次の機会を狙う。2年間の物語を，物語の順番通り季節を追いながら，ひとつひとつ撮影していったのです。

そもそも映画撮影は，〈測量〉に驚くほど酷似しています。映画の，ロケハン（下見）→美術などの準備→撮影の流れは，測量にふさわしい場所を選び（撰点作業）から，その場所に人や機材を集めて三角点を設置（造標，埋設作業）して，ようやく測量が始まる流れと，全く一緒なのです。フィルムのワンカットが，全体の中のピースに過ぎないように，ひとつひとつの地点の測量したデータを集積して地図は生まれます。

参加したキャスト，スタッフ，一人一人が，一日一日，風を感じ，雨にずぶぬれになり，雄大で厳しい風景を心に刻んでいく。寝食を共にした仲間たちと映画を作るという共通の目的に向かって毎日を送る。これほどの役作りはありえるでしょうか？

木村撮影隊は，まさに「劔岳 点の記」の物語世界を生き抜いたのです。柴崎測量隊のように，木村撮影隊は劔岳に挑み，見事に登りきり，そして映画は完成しました。効率優先では失ってしまうものを追い求めた贅沢な時間，そして参加したキャストスタッフ，一人一人の想いが，映画には写っています。木村撮影隊以外の人々には，決して作ることはできない，まさに，唯一無二の映画が出来上がったのです。